

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

齊如山と『国劇画報』

著者	有澤 晶子
著者別名	ARISAWA Akiko
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	44
ページ	5-15
発行年	2009
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009289/

齊如山と『国劇画報』

有 澤 晶 子

はじめに

齊如山（一八七五―一九六二）は、一九三二年、『国劇画報』創刊にたずさわった。（この時期、伝統演劇の中で京劇は国劇と呼称した。本稿では、京劇、国劇、伝統演劇と状況に応じて使い分ける）。京劇史の中では、一九一〇年代から三〇年代にかけて、相次いで世に出た京劇関連の刊行物六〇余りのなかで、重要な内容をもった雑誌として、『春柳』（一九一八―一九一九）、『戲劇月報』（一九二八―一九三〇）、『戲劇叢刊』（一九三二―一九三五）、『戲劇旬刊』（一九三五）、『十日戲劇』（一九三七―一九三九）とともにあげられている。そして、『国劇画報』に掲載された写真や文章は貴重なものであると述べている。^{（1）}ただし、内容についての詳細を論じたものは管見のおよぶかぎりではない。

『国劇画報』をはじめ、ここにあげた雑誌は、いずれも五年以内と短命で、一九四〇年までには停止しているが、これは逼迫した社会情勢と経済状況の混乱という外的要因とともに、それにたずさわる知識人たちの不

安定な立場も関係していよう。齊如山はこれら多くの雑誌に執筆をしており、また、『国劇画報』『戲劇叢刊』の創刊にもかかわり、執筆の根幹をになっている。なかでも『国劇画報』は、齊如山がたずさわった雑誌の中でも、齊如山が特に中心的役割をはたし、また国劇学会という研究および俳優養成をめざした組織と関連をもつ定期刊行物でもある。

この『国劇画報』はよく名前はあげられるが、出版物として再版されることもなかった。だが、『国劇画報』の編輯内容は、国劇を多角的実証的に明らかにしようとする齊如山の意識が鮮明に打ち出されていると考えられる。本稿では、編輯内容を分析することにより編輯方針の特徴をとらえ、齊如山の編輯意図と、『国劇画報』がどのような価値をもつのかを明らかにしたい。

一．創刊の趣旨

『国劇画報』の発刊母体は、北平国劇学会で、学会成立と同時に発刊がはじまっている。だが機関誌としてのみならず、一般に公開された刊行物

として発刊された。まずは、母体となったこの学会がどのようなものなのかを検討してみよう。

(一) 北平国劇学会

北平国劇学会について、第一回大会の記事が無記名で記者によって記されている。

それによると、国劇学会は梅蘭芳（ここでは、梅浣華または梅畹華の名が用いられている）と余叔岩という社会的に周知された看板役者を発起人として設立し、付属の養成所である伝習所が開設されたことが記されている。第一回の会では、胡適など数十人が出席し、会の前途についての討論があったことを述べたあと、主に梅畹華が挨拶として発言した内容があげられている。そこには、国難の時期にあつて、このような演劇の整理をおこなおうとすることに二つの理由があるとしている。一つには「演劇の力というものはきわめて大きいものがある。多くの民族はその精神性の強さや弱さを、みずからの伝統演劇の性質をものさしにしてはかることができる」とする。これは、演劇という表現の存在意義が、社会的な啓蒙力にあるのではなく、人の精神を表現でき、見る人の精神に与える力をもっていることにあるという認識を示している。二つには「伝統演劇の包容力はきわめて広く、多くの芸術分野が伝統演劇と何らかの關係をもっている」と述べ、演劇表現の総合性を意識していることがわかる。さらにまた、会設立の動機として、アメリカ公演の折に接したアメリカにおける演劇研究団体の活動に触発されたこと、そしてみずからもアメリカ演劇協会に加入したという体験が大きくかわっていることを吐露している。

アメリカ公演は移動期間も含めると一九三〇年一月から七月までのおよそ半年間に及んでいる。この間、梅蘭芳も齊如山も自国の伝統演劇の価値を再認識することができ、そのことによって、自分たちのアイデンティティーを認識し、国難の時期という状況下において成すべきことを見出したということであろう。学会の縁起は、梅蘭芳と余叔岩連名による掲載となっている。そこにおいてもまた、アメリカ公演で国劇の価値を認識したことを述べており、同時に、このまま伝統演劇を放っておくと、衰微するのは必至だと考えるに至ったとある。

学会も『国劇画報』の編輯部も活動の拠点北平の前門におき、『国劇画報』の販売拠点は北平の永豊地区、天津そして青島、上海にも配し、広く社会に向けて発信しようとしたことがうかがえる。

(二) 趣旨

『国劇画報』の趣旨の中で、モデルとなる外国誌として、欧米の舞台画報『The Theatre』、日本の『演芸画報』をあげている。それは、伝統演劇研究がさかんとなり、刊行物も少なくないものの、「研究と劇評が主で、文章と図版も重視したといった類のものはない」ため、文章と図版を重視した誌面にしたいとの考えにもとづいている。『演芸画報』は明治四〇年（一九〇七年）一月に創刊され、昭和一八年（一九四三年）一〇月号で、雑誌統合によって終刊となり、その後は『演劇界』にひきつがれている。当時の留学生が持ち帰ったものかは不明だが、これらを模範とすること、専門から見ても学術的な情報や知識が得られ、一般から見てもビジュアルで楽しみながら理解を深められる幅をもった誌面をめざしていること

がわかる。さらに、国内の北平（現在の北京）、天津、上海では画報はあるが演劇専門誌としてでているわけではないとたうえて、北平国劇学会がめざすのは、「国劇を振興し、文化を発揚し、教育を補助する」ことにあると述べている。こうして週一回の週刊誌として『国劇画報』は発刊される。

誌面ではさらに研究動向について、以前のような曲調、声腔の変遷を研究したり、戯曲の改編改良といった研究にはないことを主張している。そして、傾向としては文献蒐集と図や写真の保存に重きをおくとしている。その例としては、齊如山が撮影した精忠廟壁画の写真や朱遏先が蒐集した昇平署文献、あるいは梅蘭芳が蒐集した明清臉譜、余叔岩が蒐集している程徐の肖像画などがあげられる。

こうした傾向を受け、これらの研究成果をより多くの人が活用できるようにするために、資料を校訂整理することの必要性が新たに生まれ、さらにそれを発表提供する場としての画報の役割を強調している。蒐集した資料を公に世に問うことによって、この分野の研究に新しい風を起したいということも発刊の辞の最後に記されている。「図を経糸とし、文章を緯糸として」、国劇の整理研究をおこなうという。一般に開かれた組織となし、演劇関連刊行物のなかでも新たな道を開く新機軸として位置づけようとしている。

同じく北平国劇学会が主幹する既刊雑誌に『戯劇叢刊』がある。これは文字のみで、一九三二年に創刊され、齊如山、梅浣華等が発起人になっている。傳芸子による発刊の辞には、旧劇は研究するに値しないという意見もあるが、欠点はおおとはいへ、その「学理や芸術は、確かに減じるこ

とのない精神と豊かな価値をもっている」と国劇の価値を認め、劇評がメインであった常套を打破し、「学術面の研究整理に重きを置く」という方向を明言している。四期しかでなかったが、その内容項目は、専門の研究、考証、戯文の警句などの解説ものや、論考、意見論評など五項目を立てている。このように二つの雑誌は、棲み分けがおこなわれている。二誌の共通する精神は同じで、学術を重んじるところにある。学術研究の内容、方向性は、それまでの長い伝統としてあった曲調を重視する研究や、改編し実際に演じる創作実践への傾注といったことではない。特に、『国劇画報』では、研究資料文献、図、写真等の蒐集をしながら、それを分析し掲載することによって、演劇の歴史を多角的に見ていこうとしている。これらはいずれも、以前とは異なる演劇のとらえ方をしていこうとする強い変換の志向を表明しているといえよう。齊如山がその先鞭をつけたことは、すでに別稿で述べたので重複はさけるが、この『国劇画報』が、研究の先端的役割をにない、それ以降の研究の方向づけを示そうとしたことがわかる。

二. 内容構成

(一) 紙面構成

『国劇画報』は、片面B4サイズの四頁で、雑誌というより新聞といったほうが妥当である。特徴的なのは、第一面は紙面半分のスぺースが一枚の写真で組まれていることにある。墨筆の「国劇画報」という題字は、紅豆館主の手による。紅豆館主（一八七一―一九五二）は、清朝の皇族であった人物で、本名は愛新覺羅傳侗という。いわゆる「票友」（芝居好きが高

じてプロ化する人、または演劇マニア)に属するが、京劇昆劇に精通し、器用に何でもこなせた。⁽²⁾一頁めと四頁めに広告が挿入される。広告の一部は北平国劇学会自身による出版物の広告になっている。毎週金曜日に発刊し、価格は大洋六分だった。

以下、具体的に紙面の内容構成を整理分類して検討する。

(二)ジャンル別内容

第一面には、写真一点が配置され、その解説が一面か二面に配されることもある。全紙面を内容別に以下整理して、表1『国劇画報』内容類型』にまとめ、その傾向を検討する。

尚、1〜40は発刊番号を指し、1が一九三二年一月一日付け発刊の第一号を指し、毎週1期の定期で、40とは一九三二年一〇月二日発刊の第四十号を指す。ただしこれは、全発刊部数のおよそ半分強にあたる。内容としては、①歴史的行事、②古舞台、③伝統演劇文物、④演目宣伝、⑤論考、⑥芸談、⑦風俗、⑧演劇史、⑨脚本の九項目に分類整理して検討する。

表1『国劇画報』内容類型

類型	発刊	内容
①歴史的行事	1	二十年前、南京国民政府の要人が北京訪問した際に、「正楽育化会」メンバーと記念撮影した写真(譚鑫培、梅蘭芳、余叔岩、楊小楼)
1面記事	15	北平唯一の女科班崇雅社の集合写真 齊如山提供、解説
	19	国劇伝習署開学記念号

2面 3面記事写真		②古舞台	
36 35 21	1	6	20 18 17 14 13 10 28 40 39 34 23 12
北平国劇学会の落成舞台 旗装の特集号 梅巧玲扮する「雁門関」蕭太后画 旗装の特集号二 劉趕三、李宝琴による「探親」画 齊如山蔵	国劇学会第一回 国劇学会理事会 国劇学会第二回 梅浣華とフランス国家劇院秘書長 国劇学会理事張伯駒 国劇学会指導部門の外観 国劇学会第三回 学会編集部外観 国劇学会第三回の二 王瑤卿の近況 (以下略)	故宮漱芳齋の風雅存小舞台(清乾隆帝が演技した場所と伝えられる)、齊如山の解説 故宮寧壽宮倦勤齋の小舞台(故宮博物館提供)、齊如山解説 故宮寧壽宮の暢音閣舞台 傅惜華解説 故宮重華宮漱芳齋舞台 南府舞台 齊如山解説 清昇平署(南府)舞台 齊如山撮影 頤和園徳和園の舞台 傅惜華解説 清乾隆年間、安南王阮惠遺姪・阮光顯が熱河にある福寿園の清音楼で観劇する図 宋の舞台・清明上河図から 齊如山解説 四川萬泉桓侯廟舞台 齊如山解説 山西萬泉四望村后土廟の元代戲台 齊如山解説 四川自流井南華宮の舞台 山西萬泉四望村后土廟の元代戲台正面写真 傅惜華解説	

③演劇文物										1面				2面 3面 フィルムド写 真																																				
33	32	27	2	3	4	7	8	9	11	16	22	24	25	26	29	30	31	37	38	3	4	24	25	28	30																									
平西の瑠璃渠村関帝廟の舞台 齊如山解説 西安城隍廟舞台			浙江省建德県朱買臣廟の舞台と古朱池 十二音神図・北平精忠廟梨園会の壁画、齊如山撮影、 傳惜華解説			同右の二(つづき) 同右の三(つづき)			景山の観徳殿に祀られている神像、齊如山により二 十数年前に芝居関係者から聞いた伝説を記してい る。			北平精忠廟梨園会の壁画の四、齊如山撮影 景山の観徳殿に祀られている神像、7の記事を見た 王瑤青からの手紙を掲載			龜茲(キジ・現クチャ)の楽士像…齊如山解説 宋代院画の岳陽楼図 傳惜華解説			同光年間の北平における著名な票房「賞心樂事」の 翠峰庵			安徽省靈璧県項王廟の項羽虞姬像 安徽省靈璧県項王廟の虞姬墓			楊貴妃出浴像 陝西省興平県馬嵬駅 齊如山解説 王宝釧の像			山西省蒲州普救寺全景「西廂記」の中の普救寺 傳 惜華解説			山西省大同玄武廟曹福の像 齊如山解説 宋代の院画黄鶴楼図 齊如山解説			四十年前の黄鶴楼			汾河湾の舞台となった山西省の柳家村の窟住居 華清池と演劇			覇橋と「折柳陽関」			陝西省の潼関			陝西省山石「劈山救母」			陝西省の潼関全景		

古楽器紹介					舞台絵・舞台 版画		臉譜図		④演目宣伝		舞台写真		
33	25	27	33	38	1 }	1	1 }	1 }	4	5	1	2	3
朱買臣の墓					銅鼓 銅琴の拓本 胡琴の来歴		昇平署扮装像譜…每号一図を掲載している。梅蘭芳 所蔵。その後、百科全書などで部分的に頻繁に掲載 され、全篇が上梓された。 程長庚の群英会、綴玉軒蔵 (以下略)		綴玉軒所蔵、明代臉譜…每号一つの臉譜が紹介され る。梅蘭芳所蔵の明代臉譜図は、半世紀あまりを経 て百科全書などでも取り上げられ、臉譜を論じる時 には必ず用いられるようになっていく。その後、外 に流出したとされるが、二〇〇二年に『梅蘭芳蔵戲 曲資料図画集』 ⁽³⁾ として上梓された。 青面虎の臉譜図		余叔岩の寧武関(劇解説付き) 梅畹華の紅線盗盒 程玉霜の荒山淚 余叔岩、程繼仙の鎮檀州 蕭長華、劉連采の春秋配 余叔岩の洗浮山 梅浣華と楊小樓の別姫 錢金福の慶陽図 天津の愛好家(票友)の罵殿 女性愛好家の美龍鎮		

扇面画・字・ 絵	4	王泊生の反串、蘆花蕩 余叔岩と故王長林の殺山 于連泉（小翠花） 故俞菊簫と余玉琴の青石山 （以下略）
	1	梅晚華の梅花図 楊小樓の篆書 梅浣華の仏像画 王瑤卿の歳寒三友 故昆曲家袁寒雲と張伯駒による梅花 梅浣華の仏像画2 （以下略）
役者紹介	2	武旦、貫子林 故時小福 （以下略）
	3	黄陂調査記 黄陂の宛乗から投稿 劇「馬思遠」考 傅芸子 内廷除夜の承応戯 傅惜華 投稿を歓迎するという記事を掲載 貼旦の名称 梅蘭芳の講義 対称について 美学原理と国劇一 グラデーシオン 美学原理と国劇二 単純 美学原理と国劇三 調和 美学原理と国劇四
⑤論考 2面 3面	2	黄陂調査記 黄陂の宛乗から投稿 劇「馬思遠」考 傅芸子 内廷除夜の承応戯 傅惜華 投稿を歓迎するという記事を掲載 貼旦の名称 梅蘭芳の講義 対称について 美学原理と国劇一 グラデーシオン 美学原理と国劇二 単純 美学原理と国劇三 調和 美学原理と国劇四
	3	黄陂調査記 黄陂の宛乗から投稿 劇「馬思遠」考 傅芸子 内廷除夜の承応戯 傅惜華 投稿を歓迎するという記事を掲載 貼旦の名称 梅蘭芳の講義 対称について 美学原理と国劇一 グラデーシオン 美学原理と国劇二 単純 美学原理と国劇三 調和 美学原理と国劇四
⑥芸談	5	譚劇雜憶 譚鑫培の演技に関する連載 12 安徽省貴池梅村での目連戯 13 安徽省貴池梅村での目連戯 14 安徽省貴池梅村での目連戯 15 安徽省貴池梅村での目連戯 16 安徽省貴池梅村での目連戯 17 安徽省貴池梅村での目連戯 18 安徽省貴池梅村での目連戯 19 安徽省貴池梅村での目連戯 20 安徽省貴池梅村での目連戯 21 安徽省貴池梅村での目連戯 22 安徽省貴池梅村での目連戯 23 安徽省貴池梅村での目連戯 24 安徽省貴池梅村での目連戯 25 安徽省貴池梅村での目連戯 26 安徽省貴池梅村での目連戯 27 安徽省貴池梅村での目連戯 28 安徽省貴池梅村での目連戯 29 安徽省貴池梅村での目連戯 30 安徽省貴池梅村での目連戯 31 安徽省貴池梅村での目連戯 32 安徽省貴池梅村での目連戯 33 安徽省貴池梅村での目連戯 34 安徽省貴池梅村での目連戯 35 安徽省貴池梅村での目連戯 36 安徽省貴池梅村での目連戯 37 安徽省貴池梅村での目連戯 38 安徽省貴池梅村での目連戯 39 安徽省貴池梅村での目連戯 40 安徽省貴池梅村での目連戯
	12	譚劇雜憶 譚鑫培の演技に関する連載 12 安徽省貴池梅村での目連戯 13 安徽省貴池梅村での目連戯 14 安徽省貴池梅村での目連戯 15 安徽省貴池梅村での目連戯 16 安徽省貴池梅村での目連戯 17 安徽省貴池梅村での目連戯 18 安徽省貴池梅村での目連戯 19 安徽省貴池梅村での目連戯 20 安徽省貴池梅村での目連戯 21 安徽省貴池梅村での目連戯 22 安徽省貴池梅村での目連戯 23 安徽省貴池梅村での目連戯 24 安徽省貴池梅村での目連戯 25 安徽省貴池梅村での目連戯 26 安徽省貴池梅村での目連戯 27 安徽省貴池梅村での目連戯 28 安徽省貴池梅村での目連戯 29 安徽省貴池梅村での目連戯 30 安徽省貴池梅村での目連戯 31 安徽省貴池梅村での目連戯 32 安徽省貴池梅村での目連戯 33 安徽省貴池梅村での目連戯 34 安徽省貴池梅村での目連戯 35 安徽省貴池梅村での目連戯 36 安徽省貴池梅村での目連戯 37 安徽省貴池梅村での目連戯 38 安徽省貴池梅村での目連戯 39 安徽省貴池梅村での目連戯 40 安徽省貴池梅村での目連戯
⑦風俗	5	昆曲酒令百則 昇平署腰牌記 齊如山 戲曲の中の方言 齊如山
	12	昆曲酒令百則 昇平署腰牌記 齊如山 戲曲の中の方言 齊如山

⑧歴史	1	老郎神説 清宮中昇平署魔王の衣裳 演劇の神事 福祿寿三星の衣裳 芝居の中の断罪
	23	西安劇社概況 乾隆以来の演劇の変遷
⑨劇本	1	12 昆曲「虹霓関総本」綴玉軒蔵、傅惜華解説 13 33 双合印（昇平署本） 齊如山蔵 14 40 失街亭 齊如山蔵 15 40 鳳還巢 齊如山蔵
	28	18 30 32 京劇の変遷 齊如山 失街亭 28 30 32 京劇の変遷 齊如山 失街亭

以上、項目にはあげなかったが、このほかに、付属に設立した役者養成
 についての方針や講義内容に関する記事、古楽器関連の記事がある。

こういった記事の範囲は伝統演劇全体のどれほどの範囲を網羅してい
 のか、現在刊行されている伝統演劇専門の百科事典『中国大百科全書戯曲
 曲芸』（一九八三年八月）と比較して図示してみる。（図1記事項目比較）

内側の円が百科の項目、外側がそれに該当する『国劇画報』の項目となる。

以上の内容分類比較から明らかなのは、劇種と演出の項目以外は、『国
 劇画報』がすべて網羅していることである。劇種とは、伝統演劇をその声
 腔によってジャンル分けする概念で、これは一九五〇年以降意識化され
 た。演出に関しては、百科においても詳細はないが、これは本来演出は存
 在しないためである。齊如山が実質的な演出の先駆けをなしているが、当
 時明確に意識化されてはいない。すなわち『国劇画報』は、演劇を歴史、
 文学、文物、美術など各方面におよぶ総合的な文化現象として整理研究し
 ていることがよみとれる。さらにそこには、文献資料や、戯曲題材の遺跡

を専門家、演劇従事者、一般読者を問わず、社会に意識させようとする意図をくみとることができる。

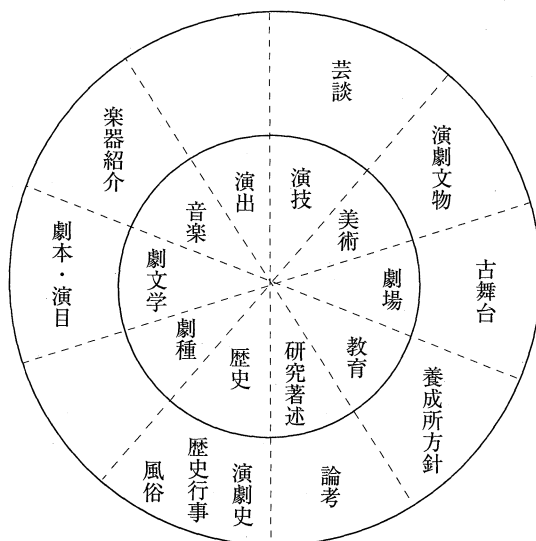


図1 記事項目比較

三、古舞台および文物に対する齊如山の考察

先にジャンル分けしたもののの中で、特に特徴的な記事で、齊如山執筆による記事を中心に検討し、齊如山の考え方を明らかにしたい。

(一) 文物

(例1) 十二音神図・北平精忠廟梨園会の壁画

齊如山と『国劇画報』

齊如山が自身で撮影までおこなったこの壁画については、傅惜華が解説を加え、四回にわたって掲載している。場所は北平崇文門外東曉市にあり、清の乾隆年間に建てられた。現存していないので、現在にとっても貴重な資料である。また、梨園の同業者組織である「行会」を置いた場所であり、象徴的存在のこの場所の壁画を最初に画報の一面に連載したことは、新しい学会組織が伝統をふまえたものであることへの意識を表出しているとも考えられる。

傅惜華によると、四面の壁画には梨園の歴史物語が描かれているが、制作者は不詳。長らくこの壁画は、筆筒で遮られていて、この存在を知る人はきわめて少なかったとする。齊如山がその存在を見つけ、中国演劇の歴史および梨園の信仰を知る上で貴重な資料だと考え、撮影しようとしたが最初は果たせなかった。一九二八年に再度訪れて交渉し、撮影設備をととのえて、筆筒も移動するなど、さまざまな障碍をのりこえて、ようやくはじめて撮影をおこなうことができた、その苦勞を記している。齊如山の演劇文物に対する価値観により、それまで見過ごされてきた文物に光をあてることができた一例である。

傅惜華の解説によるその具体像は以下のとおりである。この壁画も写真も、この紙面以外で眼にすることは現在できない。(齊如山は撮影当時、北京画報と南京雑誌に提供、掲載したことがあり、それが最初の掲載であると注記されている。さらに、北平研究院がそれを複写して彙報に齊如山の名を削って掲載したことも記している)。

壁画は八幅ある。梨園の神話と故事を内容とする。演劇史に関係するとはいつても、神秘的な傾向を多分に含んでおり、絵の原義を説明するのは

難しいという。傅惜華はまず壁画の写真を掲載し、付随した文字資料が解明できた時にその成果を掲載すると述べている。ただし、その後も掲載された形跡はない。この刊では十二音神について名を記した後、次のような役者が身につける声の型ともいべき内容をあげている。

以前は、あらゆる「鬚生」つまり鬚をつける役柄は、「小生」以外の男の役柄ということになるが、その声は「小龍虎音・雲音・鶴音・琴音・猿音」を備えていなければならなかった。「小生」は「鳳音・雲音・鬼音」、「老旦」は「鬚生」と同じで、さらに声は小さめ、「青衣」は「小生」と同様、「浄」は「大龍虎音・雷音」、「丑」役は「鳥音」と表現される。またこれら各音は、歌い手の唇、齒、舌、鼻、喉で使い分ける。そのため梨園ではこれら諸々の音の神を祀ることになった。傅惜華はこのように由来説明をおこなっている。

その後、十二音神についての考察検討は齊如山が一連の著述「齊如山劇学叢書」の『戲班』で詳しく論じている。齊如山が疑問を放置しないで、曖昧模糊とした事柄を逐一考察し明らかにしていくという態度を示す一例でもある。齊如山は、音の神の位牌を祀るのは、規模の大きめな祖師殿で祀る際であり、通常はないという。祖師の前方両脇に配置するとし、具体的な名称を示している。

この『戲班』には「信仰」の章がもうけられており、「演劇界には迷信がもつとも多いという人がいるが、実際はこのいいかたは全く通用しない。どの社会にもその崇拜する人はおり、どの団体にもその信仰するものがある⁽⁴⁾」とし、正当な理由があるのだと冒頭で述べている。こういった考えは、紙面の内容にも反映される。⑦風俗であげた「老郎神説」や「演劇

の神事」等の記事がその表れともいえる。

(例2) 楊貴妃出浴像

彫像の掲載をとりあげた26期は、「楊貴妃出浴像」とある。齊如山によると、陝西省興平県馬嵬駅にあった像で、楊貴妃が湯浴みから出てきた様子を表現したものという。写真は、ふくよかな表情と、手を顔にあてて動きのある姿態が鮮明である。ところが、現物は行方が知れない。齊如山は、「像は石質のようで、彫刻は繊細、作成年は不明。当地の人の話によると、元明以前という。惜しいことにこの像は、数年前、忽然と姿を消した。調査によると、外国人が大枚を積んで買い取ったという。国内のこういった貴重な美術品はすでに紛失したものがはなはだ多い。国内の者は、ほとんど気に懸けないが、嘆かわしい」とやや激昂した口調で述べている。こうして掲載するのはこういった美術品への関心を国内の人はもつと重視し、保存すべきであるとし、この「唯一無二の美術品」が紛失したことへの憤りを滲ませている。同時に、別号に掲載している虞姬の墓は、「美術品とは言いがたいが、国内でまた一墓一廟しかないものであり、関帝廟などと同様に論じられない貴重なものである」とし、楊貴妃も虞姬も演劇との関係は大変深いので、特に掲載する、としている。

確かに、中国の文物に対する保存意識は、公も民間もなかなか向上しなかった。特に社会情勢が不安なこの時期においてはなおさらで、齊如山のこうした啓蒙ともいえる提示につながっている。

齊如山の文献資料、図録、実際の写真といった資料蒐集に対する態度は、北平国劇学会の会員規定（8期以降毎号に掲載している）にも鮮明に表れている。特別会員の項目に、一回百元の会費納入か、または百元以上の価

値がある物品図書を納める、ということを経験にあげているのもその表れの一つであろう。

(二) 古舞台

(例1) 故宮の舞台

宮中舞台および地方にある古舞台を研究対象として注目することに關しては、齊如山はその先駆け的存在ともいえる。故宮の舞台については、すべてを網羅している。地方の古舞台は、齊如山以降、住居にされたり放置されたりで、八〇年代後半に至るまで荒れるにまかせ重視されてこなかった。そういう意味でも、齊如山の先駆的な視点が際だつた。

齊如山がどのように分析しているのか、事例をみてみよう。

「故宮漱芳齋の風雅存小舞台」は、「漱芳齋の西の間で、乾隆年間に創建。全木造建築で、竹の紋様で緑色の斑点がほどこされている。西側の〈耳房〉は樂屋である。建物の寸法は以下のとおり」とあり、舞台奥行き、間口、高さ等が記される。さらに、正面に乾隆帝による「風雅存」の額と對聯「金掌落浮盤影動」「蓮壺風送漏聲遲」が明かされる。梁柱の對聯も記される。これは嘉慶年間のもので「天作宮庭伝燕飛」「敬承堂構集鴻福」、上部の額には莊惠皇貴妃による「温仁受福」と残されていると記される。そして、額にはこういった吉祥詞が多用されているが、舞台とは何の関連もないと考察記事をつけている。

東の壁面には乾隆帝により「金昭玉粹」、對聯「瑞景瓊開樓錦繡」「歓声珠閣奏雲韶」とあり、これにより、乾隆帝が自ら演じた舞台とわかる。皇族の老輩が伝える話によると、乾隆帝は演劇の歌唱を大変愛し、大きな舞

台で演じるのは適さないため、自分の居室の中に舞台を設け、よく宦官に命じて脇役をやらせていたという。また、自分の声がやや低音なので、當時宮中で演じられていた昆弋調は歌えず、そのため、特に別の調子を作り、語りと歌唱が入り交じったものを演じ、宦官にもこれを学ばせていた。故宮博物院にある月令承応戲や九九大慶等の台本は多くはみなこの調子のものである。宮中および皇族は、みなこれを「御製腔」とよび、梨園のものはこれを「南府腔」とよんだ。嘉慶年間、道光年間の宮中における演技歌唱はみなこの調子のものであった。のちに「外学（民間の役者）」が加わって、ようやく皮黄（京劇）が宮中にはいった。しかし、光緒年間初めには、宮中では尚、京劇は連続しては演じなかった。光緒年間の末になって、最初と最後の場以外は京劇でおこなうようになった。以前、演劇界の人で、宮中に出仕したもので、この調子の音楽ができるものはほんのわずかだった。しかし、目下の演劇界で、この曲調ができるものはいへん多い。写真に写っている舞台上の二点の武器は、一つは月斧で、桶でできている。もう一つは宝剣で、彫刻と漆がほどこされきわめて美しい。どちらも乾隆年間のものである。

このように、舞台の様式、誰によって設けられ、どのように使われたのか、また、何を演じたのか、そして宮中演劇の内容と、民間での曲調の交流といったことまで考察言及されている。

(例2) 民間の舞台

民間の古舞台をとりあげたものをみてみよう。27期に掲載された平西の瑠璃渠村関帝廟の舞台である。写真からは、舞台はすでに使用されておらず、舞台の上は瓦礫が散乱しているように見える。

齊如山の解説によると、琉璃渠村は、以前宮廷に琉璃瓦を納めていた琉璃窯のある地域で、造営学社が、当時の琉璃窯の歴史に関する調査をおこなったところ、関帝廟の舞台を発見した。造営学社が調査検討をすすめた結果、金遼時代の建築で、きわめて貴重なものと判明した。撮影後、国劇画報へ提供があった。そこで、これを掲載し広く読者に供することにしたとある。

齊如山は写真を次のように分析する。「この舞台の特別な点は、本舞台の脇に小舞台があることで、それは音楽奏者が座をしめた場所である。このような建築方法は、現在の思考ときわめて近い」。

このように外部からの提供もあり、それまで顧みられなかった建築物への関心を高める効果もあったようである。また、民間古舞台の分析をとおして、歴史的変遷を視覚的に組み立てることに貢献している。

(三) 行事・特集号

35期、36期の二期にわたって「旗装」の特集号が組まれている。「旗装」とは満州族の衣装のことである。これは、その一年前におこった九一八事変（満州事変）の「国恥」を記念すると銘打つての特集号である。どのような意味を与えているのか、詳細を見てみよう。

35期一面には、梅巧玲扮する「雁門関」蕭太后画（綴玉軒蔵）となっている。「本刊の第一面に、一人の肖像を掲載することは適當ではないが、この特別号は例外である。梅巧玲は「雁門関」の第一人者である」と記す。梅巧玲（一八四二～一八八二）とは旦役の名優で、「同光名優十三絶」の一人に数えられる。梅蘭芳はその孫にあたる。「雁門関」は、梅巧玲の代

表演目の一つで、記事では、宮中でおこなう昆曲「昭代蕭韶」だったものを、梅巧玲が京劇として「雁門関」全八本に作り直したのだという。内容としては、宋の太宗が遼の征伐に出征し、宋の楊家と遼の蕭太后が雁門関で攻防をくりひろげ、最後は蕭太后が降伏するまでを描いたものだが、梅巧玲は最後を南北融和に改編した。「九一八事変の国恥を記念して、国内の人々が融和一致して国外の敵と戦うことを願い、この写真を一面にした」という。この演目「雁門関」の蕭太后という人物に、国内の一致団結としての象徴的意味があるというのである。

二面にはひきつづき、その意義について記している。「国劇画報の立場として、どのような方法でこの日を記念するか」、智慧をしばった結果、「失地（満州）に思いを致し、その失地の地域風土に関するものを題材とすべきで、国内の人がそれを見て、失地に対する深い追憶をよびおこせるものでなければならぬ。現在失った東北三省、すなわち満州の風土習慣がよびおこされる特別のものがあつた演目には何があるだろうか。何度も考えた結果、「旗装」というものが国劇の上でおそらくもっともそれに該当する特殊なものではないか、と思うに至った。言うまでもなく、「旗装」を見れば、今のひととはだれもがすぐに満州の服だとわかるし、しかも美しさを兼ね備えたものである。目下の満州はすでに占領されてしまった」。そういった考慮の結果、「旗装」特集号を企画して記念することにした。三面まですべて、過去の名優たちによる「旗装」舞台写真で埋まっている。さらに、「旗装」そのものの伝統演劇の衣装の中における位置について、「なぜ近代の国劇では特殊な存在なのか」が説明されている。国劇のきまりでは、女性の衣装は、「一に蟒（宮中の上着）、二に披（マント）、三に

褶子（あわせ）、四に宮装、この他に武の役柄は靠（鎧）が加わる、これが演劇の通常の先例である」。「褲子（はかま）襖子（綿入れ）にいたってはすでに伝統演劇の規範の中からはみ出して、すでに〈時装〉（流行衣装）である。〈旗装〉はそれより後にできたので、楽屋の衣装箱には、〈旗装〉を収めるおきまりの場所はなく、従って特殊なものということになる」。

このように、社会に対して伝統演劇がどのような意義があるのか、どうかかわっていくべきか、ということを強く意識していることがわかる。

『国劇画報』の編輯構成およびその内容から、齊如山の編輯意図を見てみると、その特徴は、第一に、実際の貴重な文物を示すことによって歴史的背景を明示している。第二にこれまで研究対象にのぼらなかった舞台美術等の領域にふみこみ、総合的な文化であることを証明しようとしている。第三にそういった舞台美術の一つ一つにルーツや規範があるのだということを精査し具体的に示している。これらによって、価値観の定まらなかった伝統演劇が、深い歴史に裏打ちされた、中国人のアイデンティティーを示すことができるものであることを社会にアピールしようとした意志を指摘できる。

おわりに

以上まだ一部分ではあるが、誌面内容をジャンルに分けてその特徴的なものについて詳細を検討してきた。これは、現在の伝統演劇研究という面から見てみると、歴史的遺産、文物に注目し、その図像資料の蒐集分析をおこなっているという明確な研究態度を示しており、総合的実証的な研

究には欠かせないものである。週刊でこのような内容のものを継続して出していくことは、容易なことではない。齊如山の総合的な企画力が、西欧の衝撃と伝統への反発の中で唯々諸々としていた伝統演劇に対して、打開する扉の一つを示した。それは、文物や図像写真などへの関心を意識化するという研究姿勢を生み出すものであった。この『国劇画報』に掲載された記事は、その後、単行本としても充実させて上梓されたものが少なくない。一連の研究成果は、齊如山の飽くことなき興味と緻密な探求心から引き起こされるものであったが、結果的に、それぞれの分野で専門的蓄積をもった人の意識を高め、時代をへても残るものを作り出す結果へつながったといえるだろう。

残る『国劇画報』の分析と齊如山の宣伝力については、別稿で論じる。

注

- (1) 『中国京劇史』中巻 中国戲劇出版社 一九九九年九月 七五四頁
- (2) 『京劇文化詞典』漢語大詞典出版社 二〇〇一年二月 六一六頁
- (3) 『梅蘭芳藏戲曲資料圖画集』河北教育出版社 二〇〇二年一月
- (4) 『戲班』齊如山全集 一九六頁 台灣聯經事業公司 一九七九年十二月